

様々な教室から音楽が鳴り響き、発表の声がこだましています。学習発表会に向けた活動が始まっています。

時間をかけて未来とつなぐ

今日もいろんな教室から、素敵な音色が響いてきます。リコーダーや鍵盤ハーモニカなど、音楽の授業では定番の楽器の音は、とてもさわやかです。あっ、ミスタッチがあったかな？同じ音を何度も練習している様子も聞こえてきました。



教室（音楽室）をのぞいてみると、自分の担当する楽器演奏だけではなく、友達の実習に力を注いでいるお子さんもいます。頭がごつつんこしそうなくらい寄り添って、指を重ねながらの協働的な活動。

あ～、音楽はいいなあ。心からそう思います。

そして、音楽ほど教育的なものはない。

音（おと）はそれだけでは音楽になりませんよね。当然。しかし、その音が連なれば、音楽が奏でられる。しかし、ここで見逃しがちなことは、その連なった音は「過去の音」であり、「過去の音」と「今なっている音」が連なり、メロディーになっているということです。だから、「過去の消えてしまった音」を覚えていない限り、音楽にはなりえない。

その上、音楽には様々なパターンがあり、リズムが生まれます。つまり、「今の音」とともに「未来の音」もイメージしながら子どもたちは確実に演奏をしています。その時間軸の中で、音（おと）は音楽になる。人間の想像力が、最後の音楽をつくる構成要素なのかもしれません。

学習指導要領（教師のための授業の教科書みたいなものです）音楽編に、音楽授業の目標の一つを以下のように記しています。

音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

この「豊かな情操」の実態が、過去と現在、そして未来をつなぐ時間軸をもつ想像力ではないかと、私は思います。この時間軸をもつ想像力こそ、学びの本質です。

今、目の前の授業がどんな価値があるのかは、子どもにはよくわからない。そりゃ、当然です。でも、1年生から少しずつ積み重ねてきた過去の授業からのつながりで見た時に、「あ～、こんなにできることが増えたんだね」「い～、まだできないことだらけだなあ」「う～、だんだんなりたい自分になっているかも」と小さな実感が募る。そして、「え～、もっとできるはずなんだけどなあ」とか「お～、こんなことができるようになるのではないかと、未来に想いを馳せる。

過去をもとに今を生きる。そして、未来のなりたい自分を夢見る。

「棺（かん）を蓋（おお）いて事定まる」という至言があります。人の評価は死ぬまで定まらない。その通りですね。音楽も教育も、時間がかかるものなんです。

そんなことを思いながら教室をのぞいてみると、いつもとはちょっと違う顔つきで、真剣に音楽を奏でるたくさんの子どもたちに出会います。とってもいい顔をしているなどと思いながら、10月25日の学習発表会を楽しみにしている私たちです。